

1-5		主題	被災地から受入れた若年性認知症の利用者への在宅復帰を視野に入れた取組みとその効果	
認知症ケア		副題	思い出が繋ぐ家族の絆	
被災者の受け入れ				
研究期間	3ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム 第2 サンシャインビル	
発表者：福島 由美（ふくしま ゆみ）			アドバイザー：	
共同研究者：下田政勝 島田正晃 井上守之 中川祥子 室賀こすえ				
電 話	042-553-3701	メール	sasaki@fukuyokai.or.jp	
FAX	042-553-3715	URL	http://www.fukuyokai.or.jp	

今回発表の事業所やサービスの紹介	平成8年3月、ヨコタ基地と七夕祭りで有名な福生市に開設しました。理事長・統括施設長の掲げる「人がその人らしく生活できる環境作り」をモットーに、利用者の皆さんの声に耳を傾けながら、職員一同日々努力と工夫をしています。デイサービスや支援センター、居宅介護支援事業等が併設しており、地域福祉の推進にも努めています。
------------------	--

《研究前の状況と課題》 3月11日に発生した東日本大震災。この地震で避難を余儀なくされた要介護者である被災者の受け入れ。この被災者は若年性認知症を発症しており、当初は緊急でデイサービスを利用していたが、事態の改善に長期化が予想されることになり、家族は苦渋の選択の中、ご本人を施設に預け、自分は地元に戻って生活基盤の建て直しに奔走することとなった。施設として、今日の前の震災被災者への支援を急務と考え、施設全体で支援に取り組むこととした。一方、介護の現場では、若年性認知症を発症し且つ震災による大きな環境変化に遭遇したこの利用者に対して何ができるのか。入所早々施設から抜け出してしまうなど、大震災・家族との離別という不安の中にいる利用者への支援を通して、あらためて認知症ケアを考え直してみた。	《研究の目標と期待する成果》 若年性認知症（告知済み）に、大震災によって家族と離れての生活という大きな環境の変化が重なり、焦りやストレスと向き合わざるを得ない利用者に対して、『家族との絆』をケアの中心として、ご本人、ご家族とともに、将来的には、在宅復帰（もしくは地元周辺の施設入所）を視野に入れた支援を目標とし、センター方式や家族からのヒアリングなどのアセスメントにより、認知症の告知を受け、病気と向き合いながら生活をしていくご本人と、それを支える家族（震災によって離れ離れになってしまった）に対して、精神的なケアを含めた支援を行うことで、「家族」や「故郷に帰る」という心の支えによって、認知症の進行を遅らせ希望を持った生活を送れるように配慮する。
---	--

《具体的な取り組みの内容》

- ・ 家族との交流について、手紙でのやり取りは読み書きの能力低下により困難な為、写真を添付したメールを活用して、視覚的な近況報告を相互に行うことで、本人・家族双方の安心につなげる。特にご自身の話は関を切ったように話すので、回想法を取り入れながら傾聴により対応する。
- ・ 関わりが深くなるにつれ、特定の職員に対しては認識が可能となり、不安感を打ち明ける等の行為も見られるため、全ての短期記憶に障害があるわけではないと考え、都度抱えている悩み・不安の傾聴を行う。
- ・ センター方式を利用し、アセスメントを行うことで利用者像を把握する。
- ・ 入所前 2 週間程度利用していた併設のデイサービスで、すでに特定の利用者や職員と馴染みの関係を構築し始めていた様子があり、午前中 1 時間程度デイの手伝いや利用者との交流の時間や、曜日を特定し、掃除等体力を使った活動を行う時間を設定。
- ・ ご本人及びご家族の心理（葛藤やストレス）を理解するため、（若年性）認知症の研修会を開催。

《取り組みの結果と評価》

読み書きや手順・段取りが必要な動作については徐々に難しくなっているなど、認知症の進行も見られる一方で、日課や役割の設定によりその時間は非常に生き生きとした時間を過ごしている。また、関わっている職員や居室の場所や居室の様子、テレビで流される被災地の映像などイメージや映像としての理解・記憶は保持できている様子も見られる。アルバム等を利用した回想法もコミュニケーションの中で役立っている。ご家族の協力もあり、カメラ付き携帯の活用により、映像を有効に活用した近況報告を継続することにより、家族の絆や双方の安心感を確立することが出来た。この安心感により、帰宅願望が多く見られたご本人から、「ここで生活しながら病気と闘っていく。」という前向きな発言が聞かれるようになった。

《まとめ》

家族の安全と自分の目標によって前向きな状態になりつつあるが、まだスタートライン。今後病気の進行を観察しながら、常に先を見越した計画を、ご本人・ご家族と共に築いていく。

《参考文献》

本人・家族のための若年性認知症サポートブック 2010 年 11 月 30 日発行 小長谷陽子編著
中央法規出版株式会社

《提案と発信》

特養施設では、なかなか出会うことのない進行過程の若年性認知症。ご本人・ご家族の不安や葛藤と向き合う中で、改めて誰を中心にケアを進めるか考えさせられた。被災地では、いまだ多くの支援を必要とする要介護者と懸命に介護に携わっている我々の仲間がいる。微力ではあるが、我々に出来る被災地支援を実行することで、現地で頑張る人々にエールを送りたい。

【メモ欄】